

# 社会教育委員ニューズレター 第10号

発行 佐賀県社会教育委員連絡協議会  
事務局 佐賀県民環境部まなび課内

令和元年10月23日(水)～25日(金)に、「第61回全国社会教育研究大会兵庫大会」が行われ、全国社教連令和元年度第3回理事会、全国社教連事務局会議、全国社教連令和元年度第3回総会に上野会長、須貝事務局員が出席しました。その概要は次のとおりです。

## ○令和元年度 第3回理事会

日時 令和元年10月23日(水)

15:00～16:30

会場 神戸ポートピアホテル

### 概要

- ・第1号議案、「令和2年度第62回全国社会教育研究大会(新潟大会)」は、提案通り承認された。
- ・第2号議案、「令和3年度第63回全国社会教育研究大会(石川大会)」は、提案通り承認された。
- ・第3号議案、「令和4年度第64回全国大会」開催は中国四国地区担当(広島県)が承認された。
- ・第4号議案、『社教情報』の値上げが確認された。時期については

来年の理事会での協議に持ち越された。また、掲載内容の充実と購入数を増やす手立ての必要性が議論された。

・第5号議案、理事の大島まな氏の退任にともない、新崎国広氏が新理事として承認された。

## ○令和元年度 第61回全国社会教育研究大会兵庫大会 全国社教連事務局会議

日時 令和元年10月23日(水)

17:00～18:00

会場 神戸ポートピアホテル

### 概要

- ・研究発表①「新潟県社会教育委員の会議と新潟県社会教育委員連絡協議会の一年」  
長谷川淳氏(新潟県教育委員会生涯学習推進課 社会教育主事)
- ・年3回、任期中計6回の社会教育委員の会議を開いている。第1回全体会で意見を抽出し、第2回の全体会で「子どものたちのために」等視点を投入して活動を計画・実行している。学校や公民館等の

視察を行い、学校とともに地域が活性化できないかを考えている。また、活動後提言としてまとめている。

・研究発表②「三重県地域学校協働活動推進のためのコーディネーター養成講座について」  
筒井昭仁氏(三重県教育委員会社会教育・文化財課 社会教育主事)

義務教育課、社会教育課、福祉部局と連携して地域学校協働活動推進のためのコーディネーターの養成を行っている。3年計画で年3回、合計9回の研修を行っている。「地域に学校が何を返してくれるか」という視点のもと、地域のメリット、学校が地域に貢献していくのをどのようにシステマティックにしていくなかが今後の課題である。

・質疑応答  
「審議のテーマはどのように決めているのか」について、生涯学習推進課の3人の係長がテーマを出し合い議長に相談してきめる、市町訪問で課題を聞き取ってトレンドを考慮しながら社会教育主事が決めている、フリートークキングの後議長がピックアップする、等の

応答があった。  
「提言は行政に反映しているのか」に対して、自然の家の建て替え等で役にたったことがあるという答えがあった。

## 全国社会教育委員連合口総会

○令和元年度 第3回総会

日時 令和元年10月24日(木)

10:00～11:30

会場 神戸ポートピアホテル

### 概要

- ・第1号議案、「令和2年度第62回全国社会教育研究大会(新潟大会)」は、提案通り承認された。
- ・第2号議案、「令和3年度第63回全国社会教育研究大会(石川大会)」は、提案通り承認された。
- ・第3号議案、「令和4年度第64回全国大会」開催は中国四国地区担当(広島県)が承認された。
- ・第4号議案、『社教情報』の値上げが確認された。時期については次回の理事会での協議に持ち越された。また、掲載内容の充実と購入数を増やす手立ての必要性が議論された。
- ・第5号議案、理事の大島まな氏

の退任にともない、新崎国広氏が  
新理事として承認された。

### 第61回全国社会教育研究大会 兵庫大会

大会スローガン

「学びと実践の収穫祭」

「いっしょ豊穣 in ひょうご」



○令和元年度 第61回全国社会  
教育研究大会兵庫大会 全体会

日時 令和元年10月24日（木）

12：15～17：00

会場 神戸ポートピアホテル

#### 概要

・アトラクション 兵庫県立高砂  
高等学校ジャズバンド部

#### ☆表彰☆

#### 受賞おめでとうございます

令和元年度全国社会教育委員連  
合表彰を、全国で65名の方が受け  
られました。佐賀県からは、武雄市  
大坪勇郎氏が栄えある賞を受賞さ  
れました。

\*\*\*\*\*

#### 武雄市 社会教育委員委員長

大坪 勇郎(おおつばいゆうりょう)氏

\*平成13年から現在まで、多年  
(10期18年)にわたり社会教育委  
員及び委員長を務められ、豊富  
な経験と知識により、行政と市  
民のパイプ役として社会教育の  
発展に寄与されました。

・記念講演 「わかりあえないこ  
とから多文化共生を目指す演劇  
教育」

平田オリザ氏(劇作家・演出家)

学校教育の改革で「身体的文化  
資本」が問われる中、社会教育の  
担う責任と果たす役割の重要性に  
ついての講演であった。

・シンポジウム「時代潮流の変化  
の中で多様な地域特性を活かし、

高め合う社会教育」

コーディネーター 朴木佳緒留氏  
(兵庫県社会教育委員 神戸大学  
名誉教授)

シンポジスト 今西幸蔵氏(桃山  
学院教育大学 客員教授)

フロアリア日詰氏(英語塾経営者)  
波多江みゆき氏(伊丹市教育委員)

御船海氏(ブレインヒューマニテ  
イ副理事長)

駒井まゆ氏(ブレインヒューマニ  
テイ)

それぞれの立場からの実践報  
告があり、質疑では「多様な地域  
特性とは何か」、「豊かな地域社会  
とは何か」についての意見が出さ  
れた。

「人とのつながりの中で生まれて  
きてよかったと思える社会」、「わ  
かりあう心を持つ社会を目指す」  
「挑戦する機会があるのが豊かな  
社会」、「個人を認め合えるのが豊  
かな社会」、「踏み出す力、つなが  
る力、越えていく力を身に着け、  
住民が、ありとあらゆる主体が行  
動することが必要」といった意見  
が出された。

地域住民の持っている力を社  
会教育というネットワークでつな

いでいくことが求められること、  
行動する社会教育委員であること  
が確認された。

事例や一人一人の意見は興味  
深いものであった。

○令和元年度 第61回全国社会  
教育研究大会兵庫大会 分科会  
日時 令和元年10月25日(金)  
9：30～12：00

会場 神戸ポートピアホテル

#### 概要

第1分科会「子どもたちの成長  
を支える学校・地域の連携協働の  
実践」に参加。

第1部：実践発表「学校・地域  
がともに未来を担う子どもたちの  
成長を支え、地域の活性化を図る。  
～双方方向の連携・協働を目指して  
～」 林りつ子氏(滋賀県高島市社  
会教育委員)、中村眞奈美氏(滋賀  
県高島市地域学校協働活動推進委  
員)

第2部：神部純一氏(兵庫県伊  
丹市社会教育委員)によるワーク  
ショップ「子どもの豊かな育ちの  
ために、私たちにできることは  
何？」グループごとに「どのよう  
な子どもになってほしいか」、「そ  
のために社会教育ができることは

何か」について話し合った。

地域に興味関心を持つ子どもや主体的な子どもを育てるために、人とかかわりを作ること、行事等で子どもに役割分担を決めて任せて活動をする等、仕掛けを作る必要性について意見が出た。

＊武井哲郎氏（立命館大学経済学部経済学科准教授）の助言

・子供の貧困さが複雑化する中、学校づくりと地域づくりにはDoing（活動する）とBeing（安心してすごせる）の両方が大切である。〔須貝事務局員からの報告〕

### 県社教委連第2回役員会

県庁にて、第2回役員会（正副会長会・理事会）を11月5日（火）に行いました。報告・協議事項については、次の通りです。

○報告事項

(1) 佐賀県豪雨災害により中止した合同佐賀大会の今後の対応について「主な意見（とりまとめ）」  
第41回全国公民館研究集会第49回九州ブロック社会教育研究大会  
第70回九州地区公民館研究大会

佐賀大会延期について

(2) 第61回全国社会教育研究大会  
兵庫大会に参加して

(3) その他

○協議事項

(1) 第41回全国公民館研究集会第49回九州ブロック社会教育研究大会第70回九州地区公民館研究大会佐賀大会（1月開催）への参加促進について

(2) 令和元年度社会教育委員実践研修会について

(3) 令和2年度九州ブロック社会教育研究大会沖縄大会について

(4) その他

※佐賀県豪雨災害により中止した合同佐賀大会の今後の対応について「主な意見（とりまとめ）」は、次のような報告がありました。

《合同佐賀大会対応についての主な意見（とりまとめ）》

合同佐賀大会開催について、各関係者にご意見を伺いました。

【九州各県社教委連会長・県公連会長・社会教育担当課長】

○次期開催県へ大会を引き継ぐ意味からも、開催を望む。

○今回の豪雨による佐賀県内の被害状況や被災者の心情、関係者の復興支援業務を考えると、佐賀県が開催「中止」と判断しても止むを得ない。

○次期開催県へ引き継ぐ意味からも、佐賀県が「縮小」開催も可能であると判断されれば、参加周知には努力する。

【県内市町】

○「縮小」開催に賛成。極力対応する。

○全体会のみ「縮小」開催では、大会本来の目的を達成できないのではないかと。

○スタッフも、当初のとおりには出せないため、半数以下で対応できるように配慮をして欲しい。

○公民館や地域の年間行事が決まっており、関係者が準備や運営・後片付け等に多忙であるため「中止」がよい。

【実行委員】

○「縮小」開催がよい。各県輪番であるため、「中止」は難しいだろう。

○分科会を開催しないのは、納得できない。内容が薄くなるのではないかと。

○「中止」がよい。役員再編成

も難しく、スタッフも揃えきれない。

【全体会シンポジスト】

○清水理事・・・12月、1月とも出席可能である。

○牧野教授・・・1月は可能であるが、12月は大学の授業があり調整は難しい。

【全国公民館連合会】

○今回の佐賀県の状況は十分理解しており、九州公民館連合会理事会の判断に任せる。

【全国社会教育委員連合】

○2日間「開催」してもらいたいが、九州ブロック社会教育委員連合理事会の判断を待つ。

○次期開催県へ引き継ぐ意味からも、佐賀県が「縮小」開催も可能であると判断されれば、参加周知には努力する。

※佐賀大会延期開催については、次のような報告がありました。

《41回全国公民館研究集会第49回九州ブロック社会教育研究大会第70回九州地区公民館研究大会佐賀大会（1月開催）に向けて》

○大会の開催については、期日を改めて開催、ただし、縮小開催す

る。

○開催期日

令和2年1月14日(火)

○参加費(2,500円)の取り扱いについては延期開催の費用にあてるため返却しない。

※日程変更により欠席される方については、大会報告書と併せて大会冊子を郵送する。

○開催会場

佐賀市文化会館大ホール

受付12:00～13:00

【全体会】

○開会行事13:00～14:00

・開会のことば 大会実行委員長  
(九州ブロック社会教育委員連絡協議会会長)

・国歌斉唱

・公民館の歌「自由の朝」

・主催者あいさつ 全国公民館連

合会会長、全国社会教育委員連

合会長

・来賓祝辞

文部科学省、佐賀県知事

・歓迎のことば 佐賀市長

・来賓紹介及び祝電披露

・表彰

全国公民館連合会表彰、

九州公民館連合会役員表彰

○シンポジウム

14:15～16:20

〈テーマ〉

「社会教育法制定70周年…。そして地域のこれから…」

\*シンポジスト

清水 明氏

前文部科学省総合教育政策局局长

牧野 篤氏

東京大学大学院教授

江頭 明文氏

長崎県社会教育委員連絡協議会長

田中 みさ子氏

佐賀市立南川副公民館公民館主事

\*コーディネーター

上野 景二氏

佐賀県社会教育委員連絡協議会会長

○閉会行事 16:20～16:30

・大会旗引継ぎ及び次期開催県あ

いさつ 沖縄県 熊本県

・閉会のことば 大会実行委員

長(九州公民館連合会会長)

※第41回全国公民館研究集会第

49回九州ブロック社会教育研究

大会第70回九州地区公民館研究

大会佐賀大会(1月開催)への参

加促進は、次のようなことで役員

会にて承認されました。

《県内からの参加者数については、

参加券保有者数と同等または以上の参加者数を達成するという目標を掲げて参加促進を図る》

・参加者数の増加を図るため、社会教育実践研修会と兼ねての実施

実施

・市町訪問による参加奨励

・参加奨励文書の発送

・スタッフの動員を市町に要請

・参加者駐車場の確保

・あらゆる機会を利用しての広報

活動

### 大会報告

第41回全国公民館研究集会第

49回九州ブロック社会教育研究

大会第70回九州地区公民館研究

大会佐賀大会(1月開催)

\*大会テーマ

「社会教育や公民館の隘路を拓く」

「がばいつながろー 人と人」

○開催日時

令和2年1月14日(火)

○開催場所

佐賀市文化会館大ホール



開会行事(大会役員)

第49回九州ブロック社会教育

研究大会佐賀大会は、社会教育の

立役者である社会教育委員と公民

館とが、共通のテーマを介して、

学校・家庭を含めた活力ある地域

コミュニティ再生の方策を探る機

会にと考え、九州地区公民館研究

大会と合同にて開催しました。

「大会参加者総数は、一四〇〇

人を超えました。」

全体会シンポジウムでは、テー

マ『社会教育法制定70周年…そし

て地域のこれから』を掲げ、シン

ポジストとして牧野篤氏(東京大

学大学院教授)、清水明氏(前文部

科学省総合教育政策局長)、社会教

育委員の立場から江頭明文氏(長

崎県社教委連会長)、公民館の立場



シンポジストの皆さん

から田中みさ子氏（佐賀市立南川副公民館主事）を迎えて行いました。社会教育委員と公民館の存在意義を共に考えるときともに、今後何ができるのか、何をすべきかを確認し、輝く未来に繋げていく公開討論を実施しました。

大会テーマのとおり、課題をチャンスと捉えて、九州各県が繋がり、社会教育委員と公民館が繋がり、そして人と人が繋がって、社会教育や公民館の輝く未来を切り拓いていく一助となる大会となりました。

### 佐賀大会 シンポジウム

#### テーマ

「社会教育法制定70周年・・・」

そして地域のこれから・・・」当初予定していたより20分拡大して行いました。これからの社会教育、公民館はどうあるべきかの公開討論が行われました。

シンポジストの皆さんから事前にいただいていた大会参加者へのメッセージを掲載しています。（詳しくは、報告集に掲載予定）

#### 【コーディネーター】



上野 景三氏  
佐賀県社会教育委員連絡協議会会長

社会教育法は、一九四九年の制定から今日まで社会教育・公民館関係者の法的基盤であり社会教育活動の拠り所でもありました。その歩みは決して平坦ではありませんでしたが、地域の協働学習をすすめる、公民館の設置・普及など着実な成果を生み出してきました。

それから70年。市町村合併、家族形態の変化、地域団体の縮小、人口減少、平均寿命の延長等、地域社会は大きく変化し、抱える課題も多様です。社会教育・公民館は、地域社会づくりのために課題とどう向き合い、果たすべき役割とは何なのか。今回のシンポジウムで一緒に考えてみたいと思います。

それからの70年。市町村合併、家族形態の変化、地域団体の縮小、人口減少、平均寿命の延長等、地域社会は大きく変化し、抱える課題も多様です。社会教育・公民館は、地域社会づくりのために課題とどう向き合い、果たすべき役割とは何なのか。今回のシンポジウムで一緒に考えてみたいと思います。

#### 【シンポジスト】



牧野 篤氏  
東京大学大学院教授

日本社会は大きな転機を迎えています。教育だけでなく、経済や福祉、防災など、あらゆる社会課題が地域社会へと収斂しています。国の形が大きく変わり、人々の生活や存在そのものが変容しているのです。それは、社会教育のあり方と深くかかわります。社会教育法制定70年の今年、社会教育の役割を改めて考えたいと思います。

社会教育を通じて、最終的に目指すべきは、個人の幸福な人生と、持続可能な活力ある社会の実現です。そのためには、より多くの住民の主体的な参加を得て、多様な主体の連携・協働と幅広い人材の支援により行われる「開かれ、つながる社会教育」への進化が必要です。シンポジウムでは社会教育を取り巻く国の動きについて紹介したいと思います。



清水 明氏  
前文部科学省総合政策局局长

社会教育を通じて、最終的に目指すべきは、個人の幸福な人生と、持続可能な活力ある社会の実現です。そのためには、より多くの住民の主体的な参加を得て、多様な主体の連携・協働と幅広い人材の支援により行われる「開かれ、つながる社会教育」への進化が必要です。シンポジウムでは社会教育を取り巻く国の動きについて紹介したいと思います。



江頭 明文氏  
長崎県社会教育委員連絡協議会会長

「住みたい、住み続けたい、戻ってきたいまちづくり」に向け、従前の社会教育実践に加えて、多様なステークホルダーによる、多様な「青少年及び成人に対して行

われる組織的な教育活動」も進められるようになってきました。

「つなぐ」をキーワードに、新たな時代における、新たな社会教育の姿を模索してみたいと思います。



田中みさ子氏  
佐賀市立南川副  
公民館主事

公民館に勤務し14年。「集う」「学び」「結ぶ」という公民館の役割を大切にしてきました。特に子どもたちの育みに多くの大人が関わる事は、子ども達の多様な価値観や郷土愛、そしてアイデンティティを育てるのだと地域と共に考え学んできました。様々な地域課題に対し学びの輪を広げていくことが公民館の使命だと思っています。

※佐賀豪雨により全体会のみ的小開催となりました。第2分科会「社会教育の手法による地域づくりを考える」にて、県内からの事例発表の予定であった大西社会教育委員の事例発表(大会冊子から掲載)を紹介します。

学びを活かし、地域をつなぐ大町煉瓦館の10年間、大人も変わり子供も変わる杵島炭鉱変電所跡活用推進会の二つの活動から、

大町町社会教育委員  
大西 奈々美氏

1 はじめに

(1)大町町の概要

大町町は佐賀県のほぼ中央に位置し面積11.5k.mの県内で最も狭小な自治体。明治後半から石炭産業が近代化・巨大化し炭鉱街として人口が急増、昭和33年には4,065人の児童が通う大町小学校が雑誌に取り上げられた。しかし国のエネルギー政策の転換により炭鉱は斜陽化し人口は急減。昭和44年の閉山後も減少を続け、現在は6,500人足らず。

(2)ふるさとに帰ってみれば

閉山前に大町を離れていた私が帰郷してみれば、町からは炭鉱時代の活気は失われ、子供達は地元を誇りも愛着も持たないように見えた。そんな現状への思いは、私のようなUターン者と閉山後も大町に残った者として差異はあったが「あの時代の活気をもう一度」

の思が誇れるふるさとを」との思いは一致していた。その思いを後押ししたのが、唯一残された炭鉱の建物「杵島炭鉱変電所跡」である。閉山時に我が家の所有となっていたが、屋根は落ち窓は破れ「廃屋」同然に成り果てていた。しかし赤レンガの壁は美しく、何より時代の貴重な証人である。この建物を活用して町に活気を取り戻したい。その思いで有志は結びつき、平成17年に「杵島炭鉱変電所跡活用推進会」は発足、通称「大町煉瓦館」の活動が始まる。直面する課題に様々な試行錯誤をする中、平成28年度に「これまでの経験から意見を頂きたい」と言われ、町社会教育委員を引き受けることになった。

2 煉瓦館の「これまで」

(1)まずは、人集め

発足当初、他所の例を参考に建物の活用はまず人集めだと考え「廃屋」のままコンサートや昔遊びなど大人向け・子供向けのイベントを仕掛け、それなりの人が集まった。人が集まると相応の環境整備が必要になるが、文化財未指定の個人所有の建物に公的補助は

なかった。それでも何かを始めなければ何も進まない。結局、屋根は私費で、窓や建具は有志の力で修理することになった。

結果「廃屋」は一転して「拠点」となった。拠点があれば活動も広がる。この自分達で「廃屋」を「拠点」に変えた一連の経験は、私の活動の原動力だと思える。



煉瓦館と子どもガイド

(2)次に、PR

一方でPRにも力を注ぎ県内外で写真展示による情報発信や、煉瓦館を主題にした絵画や写真の募集等を重ねた結果「煉瓦館」の名は少しずつ広まり始め、炭鉱時代の写真展などイベントも訪れる人も増えていった。平成20年にJ

R九州ウォーキングの立ち寄り先になったことが大きな転機になった。ここを訪れた人に対し『大町を語り、案内できる人がいない』という事実に向面したのである。

(3)人集めから、人づくりへ

大町を語れる人材の育成は「子供達が地元を知らない、愛着を持たない」という問題と結びついた。具体的な議論の中で「子供達は土を触らない」という問題も提起された。そこで子供達が地元を知り愛着を持つ活動を考え、平成21年度から「子どもガイド養成」と「農作業体験」という2つの活動を立案、秋の町内探訪ウォークと収穫祭というそれぞれのゴールを設定し、手探りながら「人集めから人づくりへの移行」がスタートした。

「子どもガイド養成」の取組みは、養成講座の講師を依頼した町担当者の「養成できる大人を養成しよう」という予想外の一言で始まった。焦りと困惑の中で大人達が講義を受けた後に講師となって子どもガイド養成講座を開催したが、それがきっかけで実は我々大人自身が地元をよく知らないことに気

づかされ、それからの学習は、子供と共に大人も地域の歴史を学び、知識を蓄積していく機会となった。「農作業体験」も周囲に助けを求めるとの連続だったが、見かねて手伝いに来てくれた地元の方々から多くの支援を頂いて無事に収穫を迎え、周囲の身近な方々が得難い指導者・支援者だと気づかされた。

子供達の活動が大人達の学びや気付きにつながり、地元の人材の活躍の場となり、それがまた新たな活動につながるという良い循環が動き始めていた。

「極論すれば自己満足」で始めた2つの活動は知識も資金も労力も不十分だったためにかえってスタッフ始め地域の人に助けられ、教えられて10年が過ぎた。



子どもダッシュ村（農作業体験）

(1)子どもたちは変わったか

現在の煉瓦館は一部の子どもたちとはいえ、活動の場として一定の評価を得られていると思う。そして成果は、これから更に10年かけて見えるものと思っている。それは進学や就職で町を出た子供達が、大町を生活の場を選んで戻って来るといふことだ。そしてその子供達が新たな煉瓦館のスタッフになり、次世代の育成に関わるようになった時、私達は胸を張って「子どもたちは変わりました」と言おうと思う。

(2)大人達は変わったか

10年間の継続は、関わる大人達も成長させた。子どもガイドの育成ではテキストや発表資料を自分で作成するようになったし、農作業体験から派生し自分たちで整備した「二千年蓮池公園」は町の新たな観光名所になりつつある。なによりも試行錯誤を繰り返しながら積み重ねたのは知識と経験だけでなく「地域とのつながり」という貴重なものだった。大人達のこの10年間は自分達も学び、周囲に助けられながら子供たちと共に成長してきた日々だった。

4 煉瓦館の「これから」

(1)社会教育委員として

子どもガイドでは参加者の減少や固定化が否めない。そこで31年度末には子どもガイドの修了生を対象に、上級資格と位置付けた「ジュニア学芸員」の制度を創設し、運営にも関わられるようにして目的意識とやりがいとを持続できるように試みている。農作業体験にはイノシシという新たな脅威が出現したので、金属柵の設置など新たな活動も必要になっている。スタッフの後継問題もちらつき始めたが、これは前述のとおり長いスパンで解決しなければならぬと考えている。地域での活動は1つ解決したと思えば次の課題が出てくるが、それらに対処し続けることで得た物もあった。

この10年が「自分達も学び、周囲に助けられた日々」なら、これからは「自分達の学びを活かし、地域を助けられる日々」を作りたい。それは自らが助けるといふよりも、煉瓦館の10年で蓄積できたノウハウや人材を地域につなぐというところを、社会教育委員としても期待されているのだと思う。

(2)夢を語ろうと結びに代えて、煉瓦館を通して地元を誇る子供を育成し、町の活気を取り戻すという夢は変わらない。さらに煉瓦館を「その一員となることがステータス」と言われる組織に育て、スタッフが喜んで運営に関われる活動を継続するという新たな夢もある。何らかの見返りを求めてする活動ではなく、自らの喜びや誇り、満足のたけにする活動であれば、参加者だけではなく運営者も進んで集まるのではないだろうか。それは地域課題解決の一つの形ではないかと思う。

煉瓦館はできる範囲で活動を続けてきた。そして今改めて振り返れば、その「できる範囲」を何とかして広げてきた日々は「一足飛び」を目指さなかったがゆえに継続できたのではないかと思う。

夢はすぐには実現しない。特に地域活動はすぐには成果が出ないから継続が重要であり、そのために関係者が「助けて、教えて」をためらわないことと、自身も楽しんで充実感を感じられることが大切だと思う。

そうやって煉瓦館ではスタッ

フも子供達と共に成長したが、当初我々が目指したほど地域を変えられたかと問われれば、残念ながら否である。それにはまだまだ時間が、それも10年単位の時間が必要だ。だが活動を継続さえすれば、いつかそれは実現するだろう。11年目の活動は、すでに始動している。

大会予告

令和2年度第50回九州ブロック

社会教育研究大会沖縄大会

○研究テーマ

地域への愛着を深め、新たな地域づくりをめざす社会教育

〜ジンブナーは地域をつくり

〜地域がジンブナーをつくる〜

○期日

令和2年11月19日(木)〜20日

(金)

○会場

第1日目(11月19日)分科会

嘉手納町立中央公民館

読谷村総合福祉センター

読谷村文化センター

第2日目(11月20日)全体会

読谷村文化センター

分科会テーマと討議の柱

第1分科会「家庭教育支援」

- ① 社会の変化に対応した家庭教育支援
- ② 家庭教育支援を通じた地域の教育力向上

- ② 家庭教育支援を通じた地域の教育力向上

第2分科会「青少年の健全育成」

- ① 地域を大切にし、誇りに思う健全な青少年の育成
- ② 社会の変化に対応した青少年の健全育成

第3分科会

「学校との協働体制づくり」

- ① 未来を拓く子どもへの育成に向けた地域と学校の連携・協働体制
- ② 地域学校協働活動推進員に求められる役割

第4分科会「社会教育委員の役割」

- ① 社会の変化に対応した社会教育委員の役割
- ② 住民の主眼的参画による地域づくりにおける社会教育委員の役割

※来年度の九州ブロック社会教育研究大会は沖縄県開催です。佐賀県の割り当ては、第1分科会「家庭教育支援」での事例発表と助言者です。

討議の柱は、①社会の変化に対応した家庭教育支援 ②家庭教育支援を通じた地域の教育力向上となっております。

現在、第1分科会事例発表希望を事前調査中です。

是非、希望の申出をお願いいたします。

希望申出期間

〜令和2年2月14日

分科会テーマ「家庭教育支援」

申出方法

お住まいの市町の社会教育委員担当課(担当者)を通じて、お申し出ください。

なお、九ブロック沖縄大会事務局より「事例発表者謝金」、県社教委連より「事例発表者1名の旅費・宿泊費を負担します。

お問合せ 左記事務局までお願いいたします。

\*\*\*\*\*

佐賀県社会教育委員連絡協議会事務局(県民環境部 まなび課内)

〒840-8570

電話 0952(25)7313

Fax 0952(25)7406

manabi@pref.saga.lg.jp